

一般社団法人 中日文化研究所
平成 27 年度事業計画書
(平成 27 年 4 月～平成 28 年 3 月)

1. 継続事業

a) 研究事業

a-1 企画研究

①『戦後日本における中国の食文化に関する知識の普及と啓蒙

—湯島聖堂・原三七と冊子「中国菜」』(担当：重森貝崙)

戦後日本における中国の食文化研究とその知識の普及・啓蒙は「湯島聖堂」での中国語講座や中国料理講習会から始まった。その中心人物は、東京帝大支那文学科を卒業、北京大学、二松学舎大学教授を歴任した原三七である。一般の人びとは、中国の食文化、中国料理が地域によって大きく異なるという基本的な知識さえ持ち合わせていなかったといっている。原は 1960 年(昭和 35 年)、「中国菜」という小冊子を刊行する。この冊子によって、中国料理の知識のみならず、「中国学術文芸風俗習慣に及んだ学問的随想」を掲載してゆきたい(発刊の辞)と構想している。映像では上記「中国菜」の一流の書き手による、記事内容を分析的に考究していく。

上記の学術展開を実務面で支えたのがお茶の水女子大学・中国文学の初代教授であった中山時子名誉教授と、その教え子木村春子中国料理研究会代表である。本研究ではこのお二人を共同研究者にお迎えしたい意向である。現在両氏は 90・80 歳台であり、当時の様子を語る貴重な証言を、映像・音声によって記録することの意味は小さくないものとする。

② 菊地三郎研究(担当：堀中浩・木村実季)

中日文化研究所の創業者・菊地三郎氏について論じたものとしては、堀中浩「『文学史』と『革命文学運動史』のあいだ」(『中日文化研究所所報』6号、社団法人中日文化研究所、2007年)や木村実季「創業者菊地三郎先生の生涯と思想」(『革新と創造—アジア・アフリカ文化財団創立50周年記念誌』、財団法人アジア・アフリカ文化財団、2008年)などがあるが、菊地三郎氏の業績の大きさに比すれば、菊地三郎氏に関する先行研究が豊富であるとは言い難い。菊地三郎氏の没後 20 年を経過した現在、その人物・活動・思想などについて語るができる関係者も少なくなっている。聞き取り調査や著作目録の作成、記録類の収集などにより、菊地三郎研究に資する資料の充実を図るとともに、その人物・思想

に関する考察を深めたい。

③ 中国と日本の民間信仰の比較研究（担当：冬月律）

本研究は中国と日本における民間信仰の比較検討を行い、現代的意義（役割）について考察することを目的としている。中国雲南省に暮らすハニ族による口承伝承を記録化し、日本とくに沖縄のシャーマンであるユタとの比較を試みる。

※ 次年度の企画研究の準備

研究のさらなる充実・向上のために文科省の科研費獲得の準備、ならびに寧波大学との共催による国際シンポジウム開催準備のために張正軍寧波大学教授との打ち合わせを開始する。（担当：欠端實・冬月律）

a-2 個別研究

経済・民俗・文学・歴史・国際関係・科学・食文化などの各分野において行われる会員個人による研究に対して1件30万円を上限に5件～10件の研究費の支給を行う。

b) 研究会・講演会等の開催事業

①研究会の開催

企画研究および個別研究の発表を行う。開催回数は年間1回～2回、会場は三鷹ネットワーク大学機構など。

②講演会の開催

平成26年度において三鷹市において開催し好評を博した「中国の食文化」に関する公開講座（映像上映及び講演）を区内で開催する。

c) 出版事業

①紀要『中日文化研究所論文集』刊行（年1回発行）及び有料頒布

②所報『中日文化研究』（年1回発行）及び有料頒布

③中国文化叢書の刊行（年2回発行）及び有料頒布

6月：『雲南からみた日本文化』欠端、李子賢、李静、冬月

④映像資料の有料頒布

2. 収益事業

茨城県美浦村に所有する「美浦研修センター」を賃貸する。

3. その他

三鷹市内で事務所の移転を行う。（移転時期は6月を予定）

（以上）